

# 退魔シスター クラリス

～主よ、淫らな我が身に  
魔を祓わせたまえ～

089タロー  
表紙イラスト：ひなくま



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『退魔シスタークラリス  
～主よ、淫らな我が身に魔を祓わせたまえ～』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# 退魔シスター クラリス

～主よ、淫らな我が身に  
魔を祓わせないまえ～

089タロー

表紙／ひなくま

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

## Characters

---

### クラリス

退魔の業を行うシスター。慈愛と正義感に満ちた清廉潔白な人柄。胸とお尻が大きく張り出したグラマラスな身体をしている。

### モルガ

四十歳ほどの神父。背は高く肩幅が広い。温和そうな顔立ちをしているが……。

男は、厳かで静謐な礼拝堂にいた。

特に筆を尽くすほどのない、変哲もないスーツ姿の会社員風の男である。そんな人物が、敬虔な信者のように教会の一角に着席していた。

やや薄暗く、ステンドグラスからの陽光のみが光源となっている。

木の原色に倣ったシックな色の広間。木彫の座席が並ぶ、主の像が見守る領域。

そこで彼は、今、清らかな旋律を乙女の口から聞かされていた。

「主よ、大いなる守り手にして導き手よ。今、ここに悩め病む者に、光明を与えたまえ……」まさに歌うような響きだった。透き通るようなソプラノの声色。

男は見やる。音色の主は、最前列の席の前、つまり彼の目の前に立ち、目を閉じて心を研ぎ澄ませていた。

濃い空色の、サラリとした清い修道服。一種のワンピース状の一枚服で、長いスカートと手首までの袖という衣装。首元だけが純白で彩られていた。

頭には、豪華なブロンドのセミロングヘアを覆うヴェール。胸元に届く長さの、教会指定のものだった。額の白いラインが前髪を飾り、単なる布切れでないことを物語る。

一目で教会のシスターと分かる容姿。そして鮮やかな朱唇から、荘厳な言葉が流れる。「高貴なる光よ、この者の内に巢食う闇を照らしたまえ」

白い喉が震え、細い眉が威厳を放つ。美しい顔に意思が輝き、柳のような腕が胸元に滑る。シャラリと掴まれるのは、銀に光るロザリオ。ペンダントだったものが引き千切られ、聖女の頭上に掲げられる。

「見せよ、悪しき者！ 主の前に隠遁は無意味！」

細腕が十字を切った。胸元に指が走り、大きな膨らみが揺れる。と、彼女の背後に後光が広がった。

瞬間、聖堂がパッと明るみ、男の背後に濃い影が伸びる。

—— おおおお……われヲ、ミルナああああ……

突然背後から声が。ひいっ！ と振り返る男。

それは、確かに影だった。しかし、確実に存在感を持っている。

影にしては大きすぎるのだ。そして「それ」は、まるで幽体のように、何かに写りこむでもなく佇んでいるのだ。

あえて言うなら、異形。人に近い形ながら、確実に人ではありえない存在。

「現れましたね、悪魔。人に憑こうなどとは言語道断！」

シスターの言で、男は初めて、これが「噂」の悪魔なのだ知った。知らず人にとり憑いて、やましい心根を煽るという。

「た、た、助けて、し、シスター……！」

厳然と見つめる修道女に、男は泣きながら縋った。

すぐ目の前の身体にしがみつく。すると、柔らかい膨らみがポフッと頬を包みこんだ。まるで頭が二つと勘違いするほどの、圧倒的な膨らみの双丘である。まさしく女である証の、見事すぎる肉塊。

だが、触れられた女は、気分を害する風でもなく、フワリと彼の頭を包んだ。

「だいじょうぶです。わたくしがお救いいたしますから」

そう言つて見下ろし微笑む顔は、綺麗な鼻筋に穏やかな眼差し、まさに若き聖母のような美しさ。碧眼は宝石のように煌めき、白い肌は化粧なしでも素晴らしい瑞々しさを誇る。「さあ、楽にしてください。神に清められし聖水が、あなたを解き放ってくださいます」つやめく乙女の唇に、掌大の小瓶——透明な液が入っている——が押し当てられ、静かに口に含まれる。

そして今度は、濡れた朱色の麗しい唇肉が、そつと男の口に近づいていく。

えっ？　と思つたときには——男の唇は、シスターの唇で塞がれていた。

「んっ……」

——ちゅっつ。つる、コクン、コクン……

驚く男は、清い聖女に口づけされる。驚くほどの柔らかさに恐怖心を静められる。

唾液を含む、濃密なキスでの口移し。冷たい水が人肌に暖められ、優しく相手の口内に

送られていく。

だが、聖女には決して不純な思惟は感じられない。まるで女神の接吻のように、静かに、穏やかに行われ、そして。

ゴクツ。と、最後の一滴まで聖水が流しこまれ、男の喉に収まった。  
途端、心を梳くような清涼感が駆け抜け、背筋がふつと軽くなった。

——おおおおお！ クルしい、キ、キえる……われガ、キえるううう……！  
背後の巨影がぶれるようにもがき苦しみ、崩れるように男から遊離していく。  
そこへ聖女が、とどめとばかりにロザリオを男の額に当てた。

「滅せよ悪魔。主よ、闇を祓いたまえ！」

——ツツカアアアアアアアアアツツツ！！

彼女の後光が焼くような奔流を放ち、影を過たず照らし尽くす。

すると影——悪魔は、身も凍るような絶叫を放った。

——ゴオオオオオオオオオオオ！！ キ、キえ……！！

まさに、真昼の陽光をも凌ぐ輝き。やや暗い礼拝堂が隅々まで映し出され、神の降臨を  
すら思わせる。

いや、その瞬間、まさに聖女は神であり、闇を照らす救世主そのものだった。  
溢れる輝きが聖堂を白く染め、影の居場所を完全に絶つ。

悪魔に憑かれた男は、目も眩むような光の中、全身を清く洗い流される感覚を味わう。そして、何かから解放されたと感じた瞬間。

——ゴオオオオ!! オオオオオオ……

神の化身とさえ思える聖女の祓いによつて、悪しき影は、完全に消え去つたのだつた。

「あ、ありがとうございます、シスタークラリス。やっぱりあなたは本物でした!」

「そんな。お力になれて、大変嬉しく思います」

悪魔を祓つた男に手放して感謝され、聖女——シスタークラリスはにつこりと微笑んだ。その笑顔に汚れた色はなく、まさに聖女のように白く輝き、驚くほど美しかった。

そんな美女に見つめられて、男は顔を赤らめる。不思議そうに瞬きをすると、彼は頭を掻いた。

「で、でも……き、キスまでしてもらえるなんて」

チラチラと上目使いに盗み見る男。その目線は、コッソリとシスターの身体を滑っていた。蒼いスカート越しでも浮いて分かるほどの、ムッチリとした太腿。パンツと左右に張り出した肉づきのよいヒップ。それらは若々しい張りに溢れ、彼女が発育のよい若い女性であることを一目で分らせる。

ヘソの辺りはキュツとくびれ、ただふくよかなだけでなく、締まるところは締まっている。

これだけでも十分、スタイルのよさを表していたが、やはり極めつけはくびれの上、タップリとした二つの膨らみだった。

95センチHカップという、まさにはち切れんばかりの乳房である。蒼い修道服の胸元で、それが重たげにユサツ、ユサツ、と上下しているのだ。歩くだけでも異性の欲求を高め、自然と視線を集めてしまう。

はつきり言つて、貞淑なシスターには不釣り合いな肉づきである。首から下がったロザリオも深い谷間に埋まりそうであり、どこか清さを色香が隠しそうな印象。

そして、クスリと微笑み胸元に掌が当てられると、丸い乳肉がぷるんつ、と揺れた。

「お気を悪くなさらないで。これも儀式なのですから」

逆に謝られて、男は当惑気味に赤面した。

彼女にとって、キスは神聖なものである。と同時に、善良な信者たちを救うための儀式なのだ。

ああやつて神のご加護を受けた自身が口を含むことによって、聖水の力をより堅実なものとする。それを悪魔に憑かれた者に口移しすることで、悪魔を祓う「退魔」を完成させるのだ。

「だいじょうぶ、神もご承知くださいます。不貞を行つたわけではありませんから」  
そう言つて微笑む聖女には、自身が美しい唇を奪われたという認識はない。

清流のような清らかさと溢れるような色香。しかし、それらをまるで気に留めることなく、ただ、「悪魔を祓える修道女」として人々を救いたいという心しかなかった。

彼女——クラリスはこの教会のシスターだった。つい最近派遣された、二十歳の若き女性である。この場では新人という立場。

だが、先のとおり、彼女は「悪魔」を祓うことのできる、極めて稀で特別な存在でもあった。これまでも何人もの悪魔憑き——彼のような——に退魔を行い、悪しき心を浄化してきたのだ。

なおも照れる男を入り口で見送り、手を振っていた、そのとき。

「さすがですねシスタークラリス。見事な退魔でした」

「あつ、モルガ神父様。そんな、わたくしなど、まだまだですわ」

穏やかな笑いと共に、一人の男が奥から現れた。

モルガ神父と呼ばれたその人物は、年齢四十前後ほどの、黒い神父服に身を包んだ男だった。

髪はオールバックで、目が細いこともいつそう額の広さを見せている。背は高く肩幅も広くて、温和そうだが鋭利な印象のある体格だった。

その男、モルガは、笑顔の目でゆっくりとクラリスを下から上へ眺めていくと、大きく張り出た胸の辺りで止めた。

あまりに無垢なシスターは、自らを慰めるということすら知らない。だから性感というものにも免疫がないのだ。

しかし見た目どおり女体はしっかりと発育しており、雄の愛撫に次々と本能を目覚めさせられる。

初めての感覚に美女の肢体が振れ、肘がクネクネと躍る。胸を隠そうともがくが、手首の縄はベッドの頂に繋がっており、とても下ろすことなどできない。

当惑するシスターは、抵抗できないままじつくりと乳揉みを楽しまれる。柔らかな処女爆乳が、タプタプと変形させられる。

「ふむ。感じてきたようですね？ 肌が朱色になってきましたよ」

神に仕える男は、ベッドに膝をつき唇を歪めて清い乙女をいじっている。M字開脚にのしかかるように。

そして乙女は、確実に色香を放ってきていた。白磁の肌は淡く色づき、煌めく汗で輝いている。かすかに甘い体臭が香り、自然と雄を誘っていく。

「はあ、はあ、な、なぜ？ なぜこんなに、わたくし……」

雄との触れあいで気持ちよくなる。そんな理解が彼女にはないため、己の身に起こる現象に、ただただ戸惑う。

「ふふ、あの葉のおかげですよ。あれには特別に仕込んだ媚薬も混ざっていてね。厳しい

鍛錬にも快楽を得られるようになっていたのだよ」

そのためか、クラリスの身体には微弱な電気が絶え間なく滑る。特にバストには顕著で、当初よりも柔らかみが増している。

だが、それで満足する好色神父ではない。肩紐が緩み、すでに外れそうな純白ブラが、彼の手によってスルリと滑らされていく。

「あ、ああ、い、いけません神父様！ これ以上は……」

（み、見られて、見られてしましますっ！）

淫靡な指が布地の下にまで忍びこみ、先端に近づくと、思わず身震いするほどの微刺激。そのまま下乳をなぞられてゾクゾクさせられつつ、指にフロントホックを許す。

深い谷間に指が挟まり、ヌチリといやらしく絡みつく。そのままチュクチュクと汗を鳴らし、プチンと留めが外されると。

——ぱっつ。ぷるっ、ぷるるりんっつ！

あつ！ と眉を悩ます美人シスター。たわわに実った二つの乳房が、ブラの保護を失ってしまう。

「おお、美しい。さすが噂に聞く美人退魔師、何と罪深き身体だ」

観音開きで胸の膨らみが暴かれ、プリンのごとく揺れ躍り出る。現れた二つの丸みは、とても巨大ながら自重に屈することなく、見事に球状を保っていた。

白く、きめ細かく、かつ潤いを失わない素晴らしい乳肌。それでいてサイズは圧巻で、小玉スイカを二つ並べたようなものだった。

そしてやや上向きの頂点には、濃い朱色のあでやかな柔輪。乳首は小さいものの、プツクリと先を尖らせていた。

「いけません神父様、こ、こんなの、神様がお怒りにっ」

拒絶とは裏腹に、男を誘惑して仕方ない豊満な乳房。汗ばみ輝く肌、唇を誘うような勃起乳首、そのどれもが好色な男を喜悅させてしまう。

「いいえクラリス、これは修行なのです。神もお許しになるでしょう」

囁く司祭は、美しい処女爆乳を視姦した後、再び指を埋めてムツチリと揉み始めた。

——むちっ、むちっ、もむっ、もみゅりっ……！

「あっ?! あっ、あっ、はあ、はあっ、い、いけま……!」

しかし、拒めない。腕は縛られ、足もまともにバタつかせることすらできない。が、それだけでもなかった。身を起こる現象に、美女は混乱させられたのだ。

（そん、なっつ。む、胸を、いやらしく触られてるのに、あ、暖かく……）

直に触れる感触は、これまで以上に身体の芯を熱していく。

硬い指が食いこむたびに、柔らかな脂肪が押し潰されて、ムニムニと変形させられる。するとビリッと乳奥が痺れ、意識が甘く緩んでしまう。

性に無知な聖女と言えど、さすがに生乳房を晒すのは異常と感じる。止めなければと思うのだが、奇妙な恍惚がどこかで歯止めをかけるのだ。

「はあ、はあつ、つあんあんっ!? 胸が、当たって……っ！」

——もみもみもみつ、パチン！ パチンっ！

左右から揉まれて揺らされると、谷間で乳房がぶつかり艶かしく弾けた。綺麗な汗が舞い、さらにプルプルと揺れ惑う爆乳。

だが微弱な痛みすら、胸に突き刺さるような媚感となつて鼓動をドクドクと早めてくる。この不可思議な悦に、清いシスターは翻弄されっぱなしだった。今やはつきりと好色を浮かべる男を目にしても、身体の火照りで拒絶の意思を削がれ、なぜか力が抜けていく。雄掌もすでに、餅をこねるようにタップリと揉みこんでくる。指の間から柔肉が漏れ、あまりにも淫靡だった。

もちろん乙女も黙していない。この淫らな行いから逃れなければと、身を振って制止を試みる。だが、神の使徒たる女体は、次々と溢れ来る女の本能に少ない自由すら奪われつつあった。

（だ、だめ！ こんな、不貞を働いているのに……わ、わたくし……）

敏感——そう、認めねばならぬほど敏感な乳房を、異性の掌が何度もしつこくこね回してくる。その不埒な感覚に、身の内の何かが燃え上がるのを止められない。

さらに、硬い指先で乳先を弾かれると——ピンっ、ピクピクン！

「あっ!! んんんんうっっ!」

鋭い媚電が奥を突き刺し、胸が強く高鳴った。思わず仰け反る処女シスター。

「おやおや、君はこの大きなお乳がお好きなようですね。いいでしょう、まずはここでイカせてあげましょう」

そう笑むと、神父の指がさらに容赦なく突起を弾きだした。

——ピンっ！ ピンピン！ クリクリっ。

「あっああああっ!! いけっ、いけま、あああああっっ!」

朱粒から次々と媚電が刺さる。あまりの刺激に聖女の胸元が跳ね悶える。

それは、まったく未知の領域だった。ヒリヒリするような、ともすれば痛みと錯覚するもの。

しかしはつきりと違うのは、それがどこか、癖になりそうな愉悅をも含んでいることだった。

（そ、そんな、わたくし……お、おっぱいをいじられて、悦んでいる？ なぜ？）

熱した脳裏でクラリスは疑問に思う。

彼女とて、人として性交くらいは知っていた。だがそれは、子孫を残すための神聖な儀式以外ではありえなかった。

愛しあう男女が生殖器で触れあい、母体に胎児を宿す。つまり、結合以外の行為の意味を知らないのだ。

「ふふ、薬の効能とはいえ、随分と感度がいいようですね。はしたない娘だ」

「あつ！ あつあつあうつ！ こんな、あうつ！ だめ……！」

なおも続く乳首責めは、絶え間なく電流を胸の奥に滞留させる。処女の顔に切迫した表情が浮かぶ。

柔らかい乳房がプルプルと波紋を刻み、雄の視線を楽しませる。プクツと尖った朱色のニップルは、何度も爪弾かれては艶かしさを増していく。

それは恥辱なはずなのに、女の脳裏を甘く霞ませていく。蒸し暑いような刺激に、全身が緩んでいくような錯覚。

もはや熱感はある所に広がっており、むき出しの肌からは汗の玉が浮き出していた。それが伝い落ちる微感覚すら、ゾクリと背筋を震わせる。

羞恥に隠れようとしていたM字開脚も、今は力なく汗濡れた太腿を晒すばかり。屈曲した腹も、淫靡な手つきにピク！ピク！と痙攣させられる。

しかも——クラリスは感じていた。下腹部の、いや、股間の奥で、何かが蠢くように熱を持っていくのを。

「はあつ!? はっ、はっ、はっ、はああつ……！」

悦であることを、経験と本能が教えてくれた。

「クク、ハハハ、ではテオ、もっと犯してやりなさい。このシスターが君の悪魔の元を搾り取ってくれる」

「し、シスター……は、はいっ、お願いしますうっ！」

真つ赤に乱れた美顔に誘われるまま、童貞少年が抽送を再開してくる。射精を終えたばかりの性器は、しかし若い回復力に恵まれ硬度を取り戻し始めた。

「ああつ！ ああつ！ し、シスター、シスターああつつつ！」

——ズムムううっ！ ズムン！ ズムン！ グプッグプツツ！

「はヒイ!? アヒっ！ あヒイイ!? しゅう、しゅごっ、しゅごスギますううう!!」

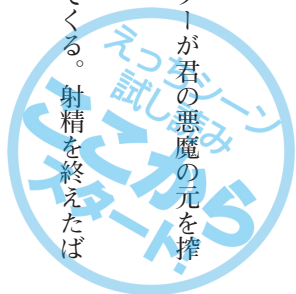
再び剛毅と化した彼のペニスは、途方もない肉圧で狭膣全体をこじ開けてくる。

圧倒的な存在感が胎内を、雷に打たれたように感電させる。火刑に処されたように全身が熱くなり、清い理性すら微塵に碎かれる。

それでも包容力に富む聖女の柔膣は、暴れる子羊を受け止めるべく細かな粒襞で丹念に愛撫していく。

「きつつ、気持ちいいっ！ シスターのオマ○コ、ヌルヌルであつたかくてつつ！」

初めて味わう抽送の気持ちよさに、テオは可愛らしく悶えた。巨根とは裏腹の童顔は、年上女性の琴線に触れるものがあつた。



「ヒイ、ヒイ、い、いいわぁテオ、わたくしでもっときもちよくなつてえ……!」

美女退魔師の喜悅顔から、確実に当初の目的が消えていく。今や極太の勃起に性感をわし掴みにされ、瞳を霞ませ恍惚の涙を溢れさせている。

(きいい、きもちいいい……! テオのおペニスウ、ナカでグイグイあばれてえええ!)

そのサイズゆえ、褌という褌が残さずかき回されていく。直前まで処女だった狭い膣が、お産のごとく拡張されて若い男根に責められていく。

敏感な粘膜が猛烈な摩擦で焼かれ、メラメラと赤い愉悅を子宮に叩きこんでくる。それが今は狂いそうなほど快感で、自ら恥股を押しつけて味わい出してしまふ。

さらには——ぶぶおおっつ! ぶぼっ! びゅぼおっ!

「ひいひいひい!! てるウ! でてますウウウウウ!!」

ううっ、と唸る少年から再び粘液が注入されると、甘い感触に下腹がブルブルと震えてしまふのだ。豊かな臀部もビクビクと痙攣し、ふやけた花卉からは白いものがブシュツと吹き零れる。

「ククククッ。堕ちたなクラリス。悪魔憑きにヨガラされるようでは退魔師失格だな」

頬を歪ませる神父が横合いから、復活した勃起ペニスを彼女の乳房にズブリと突きたてる。豊満な乳房が卑猥にくぼみ、柔らかさと若々しさを魅せつけた。

「アア神父さまっ、胸、ムネがっ、アアアアアアアン!」

そのままズブズブとピストンされると、乳性感が呼び戻されて乳房の奥がまた熱くなる。結合に揺らぐHカップは、艶かしく動いてカリの表面にねちっこく吸着した。

下半身と上半身との、二重性感にクラリスは堪らなく身悶えした。目覚めた女の本能は、拘束の息苦しさすら忘却させて男の淫臭と感触、熱さと硬さを味わってしまう。

（アア、アア、す、すてきなおペニスウ、もつと、もつと味わいたいっつ）

女の幸せをようやく知った——そんな錯覚に陥り、動けない自分にもどかしさすら感じ始めた、そのとき。

—— ツツググツ。ビチツ、ビチビチツツ……！！

「はあ、はあ、つつえ……？」

「つつなにつ？」

細い指が異様な音を立て、聖女と神父が各々驚く。

何と、少年の指が拘束していた縄にかかり、ブチブチと引き千切っているではないか。

「ど、どうしたテオ？ いったい？」

「ううウウ、うるさい……うるさいっつ。邪魔なんだよおっ！」

啞然とする男の言葉をはねつけると、少年テオは、人間とは思えない力ですべての縄を千切ってみせた。

両手両足の拘束を失い、自由の身となったシスタークラリス。が、彼女が何かする前に、

少年は強い力で組み伏せてきた。

「——オオオオオっ！ クラリス、クラリスっ、もっとやらせろおっ！」

「てっ、テオ!? はうっ！ うひひひひひアアアアンつつっ！」

目を血走らせた年下に押さえつけられ、そのままピストンを再開される全裸シスター。何が起こったのかも分からぬうちに尻を掴まれ、漲る一物を強く突きたてられる。

——ズシィーン！ グポッ！ グポッ！ ギュポッ！ ギュポッ！

「ヒイヒイヒイ!!! アヒイ！ ハヒイイ！ しゅごっ、しゅごいひひひひひつつ!!」

うつ伏せになったところを下腹を抱え上げられ、荒々しく犯されてしまう聖女の媚膣。真っ赤に充血した入り口が削られ、激痛にも似た快感が腰の筋肉を緩ませる。

唐突な変化にも、クラリスの豊かな肢体は柔軟に適応しタツプリと肉器をシゴき上げていく。拡張された膣穴は、すでに少年の剛直にも耐えうるほど開発されてきていた。

「オオ、オオオ！ クラリスのマ○コ、最高だ！ デカイチンポにピッタリ吸いつくう！」

「ヒイヒイ！ テオお、すごいっ！ 太いイッ！ 硬いひひひひひッッ！」

獐猛に豹変した彼の性器は、これまでとは打って変わった勢いで女膣をガンガンと突いてくる。

凄まじいまでの後背位に聖女の性感はますます押し上げられ、背筋がバチバチと弾けて

くる。

「らあつつらめええつつ！ なかあ、おま○こつ！ めくれちゃうウウウウつつ!!」

濡れた肉ビラも、太すぎるサオに絡まってメリメリと外へ引きずり出されてくる。次に勃起を叩きこまれば、ブチュツ！ と音立てて再び奥へと押しこまれる。

「らめええええ……！ こんなあ、こんなのおおお……わらくしい、イっちゃいますウウウウウウ……つつ」

獣のように膣を犯される快感。粘膜を血管でこすられる痺れ。それらが——堪らなく気持ちよく、意識が白いで夢心地になるのが止められない。

もはやクラリスは自由になっても、セックスをやめようとは思わなかった。可愛らしい少年が興奮し獣になっていく様すら、保護欲と淫らな欲求を溢れさせて仕方ない。

しかも彼のペニスはあまりにも長く——グポッ！ ゴリッ！ ゴリゴリゴリイッツッ！  
「つつ!! ……つつつきヒイヒイヒイヒイヒイ!!? あぎゅつつアグうウウウウウウ!!」

（そつつそんなあつ!? ふかつ、ふかすぎるうううううううう!）

力強い挿入が、ついに膣の奥、子宮の入り口すら突破したのだ。途端に目の中に激しい閃光が溢れ、一瞬、何も考えられなくなる。

恐ろしいほどの肉圧が、もう一つの処女膜のような門を押し広げる。そのまま少しザラ

つく子宮内部をカリで舐める。

すると、ヌルリとした感触に鳥肌が立つほどの甘刺激を感じ、全身がガクガクと痙攣を始める。

「はあ——ヒイヒイヒイヒイ……！ きい、きもち、よすぎますウウウウウウつつ」（なあ、なんて、すごいいいっつ。おなかのおくまでパンパンにいいいっつ！）

あまりの快楽に腕を突つ張らせることすらできず、ボフツとベッドにくずおれる淫聖女。肉づいたバストがタプンつとたわみ、脇からはみ出て実にいやらしい。

だが、そんな弱々しい裸体を氣遣うこともなく、若く獰猛な雄は膣と子宮を犯していく。「オオオ、オオオオ！ イイぞおクラリス！ スバらしいマ○コダああ！」

——ギユブツギユブツ！ グブグブ！ ドスッ！ ドスッ！

熱く、鋼のように硬い若男根が、清い子宮を隅々までかき回してくる。開いたエラに子宮口を引っかけられれば、内臓ごと甘い刺激が走り抜けてヒップがはしたなく躍り狂う。

雄腰に強く結合されては、掲げた尻肉が心地よく弾け、豊かな臀部にパッ！ と大量の汗を撒き散らす。

「ぬうう。これは悪魔の仕業なのか？ とてもテオとは思えん」

さしもの強姦神父も、この異常事態は想定外らしい。確かにテオの目は血走り、オドオドした雰囲気など微塵もなくなっている。

しかし、それで止める男ではない。激しく交尾される美女の口元に、黒々とした練達ペニスに差し出された。

「さあ啜えろ。わたしも共にイカせてもらおう」

「はあア、ハイイイ。はむっ、ング、ングッ」

それは自然な動きとして、カ리를口で頬張っていた。目の前の濃厚な雄の臭いが、「啜える」という命令を拒ませない。

「んんっ！　じゅっ、じゅるじゅるあむううつつ！　はあはあ！　おいひい、クサクつておいひいれふうう。はむちゅっつ」

ツルリとした表面を舐めるたび、強い苦さが広がっていく。こびりついた精液も、決して美味とはいえない。

それでも、雄の臭いと滲みこむような汚辱感が、途方もなく脳裏を蕩けさせて、しゃぶるつきを断念させない。

（おお、おとこって……すごい。すてき。こんな硬いのに犯してただけでえつつつ！）苦味が喉と口内を痺れさせ、珍味のごとく舌を這わせてしまう。頬の粘膜にも肉先をこすりつけ、鈴口の感触をもじくりと味わっていく。

もう、何が何だか分からなくなる。今はただ、この繋がりを手放したくない。

クラリスはしがみつくように神父の腰に両手を伸ばし、ヴェールを振って自ら食欲にし

やぶりついた。ジユポジユポと卑猥な音が立ち、唾液が隙間から泡立って滴る。

「おおいぞ！ このスケベな神のしもべめ。濃厚な聖液を受けて昇天するがいい」

「んああああはいいつつ！ 昇天つ、イカせてくらさいいいつつ！」

いつの間にか、全身には迸るほどの飢餓感が覆いつくしていた。

快楽の果てにある閃光のような感覚。それが忘れられなくて、切なくて、どうしようもなく刺激を求めてしまう。

汗で輝く白い肌が、甘い芳香を漂わせて雄を誘惑する。もがくようにくねられる肢体が、淫性感を欲して驚くほど色っぽい。豊かなヒップがフリフリ揺すられ、たわわな乳房がブルブルと躍らされ、犯し尽くされることを哀願していた。

「イヤらしいメスめ！ ボクの、オレのチンポでイカせてヤル！」

——ズチュッズチュッ、ゴポンゴポン！ にゅぷるにゅぷるじゅぶじゅぶぶつ！！

色に堕ちた聖女を見下ろし、強姦少年は抽送速度を上げてきた。神のものだった聖域を独占すべく、膣から子宮までを力強く撫でてくる。

「アヒいいイイイイイン！！ て、テオおおつもつとおおつ！ もつときてエおくまでエエエっ！」

シワクチャになったヴェールから豪華なブロンズがこぼれ、金髪美女が激しく揺さぶられていく。朱色の乳首が頭のような爆乳と供に躍り狂い、先から綺麗な汗を飛ばした。さ

らにその柔肉すら、少年の両掌によって揉みしだかれて生殖行為の道具にされる。

もちろん眼前ではどす黒いペニスが唇を汚し、黒い陰毛を鼻先まで近づけて喉の奥まで侵食していく。吐き気に似た恍惚に清い意識が責め犯される。

テオのカリが膣口まで引き抜かれ、ズリズリと媚肉を引きずり出す。そこで一気に奥まで刺され、媚肉を絡めて子宮口を割られてしまう。

そのまま特大の亀頭に子宮壁をコリコリと責め楽しまれ、脳まで溶けてなくなりそうな激快感。

背中を舌で舐められ乳房を揉まれ、全身が性感帯と化して快楽が止まらない。喉の奥でカリをシグくことすら、息苦しいのに壊れそうな甘い愉悅。

ヌチャヌチャドスドスと、喉と子宮を叩く男根が今はすべてを忘れさせてくれて、快感に膨らむ様すら女の本能を熱く満たしていく。

「はぐっ、んむむじゅるるうつつ！　ハアハア！　もおらめイギそお——イイ、イギますううう、しんぷさまあ、ておおオオオつつ!!」

「わ、わたしもだ、もうすぐイクぞ。おおつ、君の口に聖液をぶちまけるぞつ」  
「オオオオレも、ボクもイクううう……クラリスのナカにぜんぶダスぞオオつつ」

ビクビクとのたうつ強姦勃起が、もう一回り径を増す。凄まじい圧迫感が喉と子宮、子宮口を襲い、恍惚の限界に性感以外の五感が麻痺していく。

——ドスドス、ズシンズシン！　じゅぶじゅぶレロブチユツツ！　タプンツ！　タムムンツ！

「アオッ、アウッオウっ！ イグウウウ、イグ、ウングうううっ！ もほお、イグウウウ  
ウウウウウンンっっっ!!」

もはや退魔シスターとしての矜持も失われ、悪魔に操られた少年にすら望んで犯されていく。激しい性感に、ひたすら高みへと追いやられる。

気持ちいい、ただイキたい、子宮に溜まった欲求を解放し、雌の悦びで弾けてしまいたい。強姦に目覚めさせられた本能が、媚肉をかき混ぜるサオと子宮をこね回すカリをギユツと締めつけて放さなくする。自然と、濃密な子種を求めて強くも優しく搾り上げていた。「クオオオ締まるっ!! マ○コが締まるっ! イクっ——オオオイクぞおおおつつっ!!」

「クッ！ わたしも——喉が締めつけてっつ！」

口内と子宮内の雄性器が、一際大きくブクリツ！と膨れ上がった。そして。

——つっヅドオオオオンッッッ!!

「んゴオオオオオ!? んヒウウウウむむむむむんんんんんっつっつ!!」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**